地下鉄サリン事件の対応に当たられた方々

「営団地下鉄」霞ケ関駅務区助役 50代（事件当時） 男性の手記

地下鉄サリン事件が発生した1995年3月20日、私は千代田線の全泊勤務の非番の日でした。A725K列車が霞ケ関駅に着いた午前8時12分、朝の個別点呼中に事件の第一報が届きました。それを受け、千代田線のホームに向かうと電車の2番目の乗車口から点々と油のようなものが垂れた跡があり、ホームの円柱のところに30センチから40センチほどの新聞紙の包みと、車内のサリンを拭いて丸めたと思われる新聞紙が6、7個あったと記憶しております。その後、同僚のAさん・Bさんと一緒にサリンを拭き取った新聞紙を袋の中に入れました。私の頭の中には、サリンとは知らず、何か爆発物ではないかというおそれがあったものですから、とにかくこれをホームに置いておいてはいけないとの思いで、下の階の駅事務室に運びました。同僚が駅の状況を報告してくれたのですが、私はそのときにはもう体ががくがくと震えていました。時刻表を読もうと思ったんですが、全く数字が見えない状態でした。運輸司令所には次々と異常事態の連絡が飛び込んできていました。これを受け、運輸司令所が8時35分に日比谷線全線営業停止を指令、そのほかの路線でも対策を施しました。その頃、私の身体は震えてきました。席に座ったのですが、じっとしていられないのです。事故の記録を記そうと、ペンを持ち、メモ用紙に「8時」と書こうとしたのですが、手が震えてしまって文字になりませんでした。そのとき、駅事務室に女性のお客様が来ていることに気付きました。「まだここは駅事務室だ。まだここで爆発する可能性もある。」と思い、先ほど駅事務室に持ってきたビニール袋をもう1度抱えたのですが、女性のお客様に気付く直前に同僚のAさんが意識不明であったため、まずAさんをなんとかしなければと思いました。私は、震えながらも夢中になって声を上げ、一生懸命指示を出していました。後で別の職員に聞いた話では、私は鼻水は出ている、涙はぼろぼろというひどい状態であり、尋常ではない様子だったようです。

サリンの処理が終わり、自分たちの仕事も終わったということで、私は制服を脱いで顔を洗いました。そして、顔を拭いている間に途中で座っていられなくなり倒れこみました。その後、吐き気がして呼吸困難になりました。Bさんと私はほとんど同時に倒れこみ「苦しい！」と言いました。それほどサリンを吸っていたんですね。同僚の「今救急車呼んでいるから、頑張れよ。」という言葉も耳に残っています。それ以降の意識は全くなくなってしまいました。

翌日21日の11時頃、意識が戻りました。職員と筆談をしたのですが、そこでAさんとBさんが亡くなったことを知りました。「あ、自分だけが生き残ってしまったんだな。」と想いました。現場の責任者である人間がサリンの対処法を勉強していれば、きっとAさんもBさんも殉職させずに済んだのではないかという気持ちはずっと残っています。なんでそこまで勉強しておかなかったんだという自責の念があります。制服を着て帽子を被り業務に就くだけで責任が生じるのです。たとえ今日発令になった人でも、何十年と勤めた人でも、その責任は変わりません。事故が発生したときに自分たちが最善の努力をできるかどうか、また、危険な場所はどこなのか、そのようなことをお客様の身を守るために

常日頃考えるという、地道な、しかし、駅を守る駅員としての大きな務めがあります。表には出ない努力ですが、このようなことを絶えず意識していれば、お客様の身も守れると私は考えます。

私が今生きていられるのは、同僚が命を懸けて動いてくれたからです。ちょうど私が運んだサリン1袋で4万人相当の殺傷能力があると聞きました。まさに、AさんとBさんは、私を含めて3万9998人もの命を救ってくださったと私は考えています。

引用

〇証言・地下鉄における有毒ガス事件～その時営団職員はどう対応したのか～
〇地下鉄サリン事件(安全研修使用動画)